

# オルテガ世代論 —歴史社会における時間性に関する一考察—

長谷川 高 生

## Ortega's Theory of Generations — A Study of Temporality in the Historical Society —

Kosei HASEGAWA

“Temporality” is a critical concept in the philosophical world of the 20th and 21th centuries. E. Husserl's Phenomenology, M. Heidegger's Ontology, and J. Ortega y Gasset's Philosophy of Life suppose the temporality under the current of life and consciousness in the human subjectivity. Most oriental philosophies and contemporary eastern philosophies are mainly interested in the conditions and temporality of individual subjectivity, but have little interest in the dynamic change of historical society. However, Ortega's philosophy of vital reason and historical reason offers not only the temporality of life, but also the concept of “generations” as the temporality of history and society. Ortega's theory of generations is mainly found in his two books: “Modern Theme” (1923) and “Man and Crisis” (1933). Ortega shows, in the former book, individualist and collectivist interpretations of historical changes, vital sensibility as a fundamental source of historical changes, a generation as a dynamic compromise between individual and mass, distinctions between elite and ordinary members of a generation, a certain vital attitude toward life as common point of departure, distinctions between old-age generations in ages of accumulation and young generations in ages of elimination and dispute, the new scientific discipline of metahistory, the historical mission of each generation in history, pursuit of psychological necessity in history, and two types of minorities: men of deeds and men of words among other ideas. In the latter book, he proposes such ideas as the inevitable necessity of change in the structure of the world, three different “today” among a boy, a mature man and an old man, the essential anachronism of history(internal disequilibrium), the same age and the same vital contact in a generation, historical exactitude in generations, age=“zone of dates”, human life divided into three or four ages, the world in force, the spirit of the times, distinctions between contemporaries and coevals, polemic and collaborative succession in generations, five different stages of life(childhood, youth, initiation, dominance, and old age) divided by fifteen year intervals, historic reality composed of the lives of men between thirty and sixty: one stage of initiation and gestation, or creation and conflict and other stage of dominance and command, the zone of chronological dates of a generation determined by the entire series, the decisive generation and its eponym, the generation as a historical framework or a visual device, and the generation as the structure of human life in a given historical moment.

\*Key Words : generations, vital sensibility, anachronism of history, three or five different stages of life, fifteen year intervals

世代、生の感性、歴史の時代錯誤、人生の3つあるいは5つの段階、15年間隔

## I はじめに

少なくとも20世紀以後の現代哲学の思潮からすれば、人間の生において、時間性という概念は決定的である。E. フッサール（1859－1938）の現象学、M. ハイデガー（1889－1976）の現象学的存在論、J. オルテガ・イ・ガセット（1883－1955）の生の哲学などでは、人間の意識や生の根底において「時間の流れ」、すなわち主観的な時間性を観察している。そしてこの時間性がこれまでの西洋の形而上学や「近代」の理性主義の静態的・固定的・同一的な性格を揺り動かし、人間に動的な開かれた視界を与えるのである。今後はおそらくこの「時間性」という概念が西洋思想上の「存在性」や「目的性」と対峙することによって、東洋思想の仏教の「空」と「無」の思想、儒教・朱子学の「気」と「理」の思想に照応され比較考察され、統合されていくのであろう。ただ西洋思想上の時間性の概念や東洋思想上の空や気の内容は専ら人間個人の内面の主観に探求の目を向けてきたが、人間の集会的・集団的形態についてはどうなのか。

歴史上、仏教や儒教に代表される東洋思想は社会の分析や歴史の動態の科学的解明には積極的な関心を示さず人間人生における宗教的・道徳的・教訓的な見解を引き出すのみであった。この点、西洋の哲学思想は人間個人の内面主観のみならず人間社会や歴史のダイナミックな進展をも考察対象としてきた。しかしながら、一瞥したところ、フッサールやハイデガーなどの現代の哲学思想は人間の個別的・個人的形態については深遠な思想を提供しても、歴史的变化や社会変動などの動的な社会的現実を捉える明確な概念や方法を提示していないように見える<sup>1)</sup>。

これに対してオルテガは彼独自の生の哲学のみならず『大衆の反逆』などの社会哲学を提供してきたし、また歴史や人間社会の変化・

進展を考察する最も有効な概念・方法として「世代」という理念・方法をも打ち出している。これまでの社会思想において人間の歴史や社会の動的な形態を解明する「時間性」を示す概念としては、階級・階層変動、技術革新・生産力・景気変動、社会運動・政争・革命・戦争などが挙げられる。時間性を表すこれらの多くの概念のなかでも、近代社会の動態分析には有効であった階級・階層概念が現代社会の変容を十分に分析・解明できなくなった昨今の社会状況においては、歴史や大衆社会の動的な性格を解釈するかなり適合的で有力な概念としてこの「世代」という概念が浮上してくるのではなかろうか。そこで、本論文は人間の歴史や社会の時間性ともいべき「世代」の概念をオルテガの見解にそって考察する。

## II 世代について

### (1) 世代論

人類の歴史上、社会（あるいは、社会システム）上の変化を誘う時間性の指標は、身分、階級、思潮・思想、人物・英雄、世代など多様に考えられる。スペインの哲学者オルテガは彼の編み出した生の哲学の性質上、「世代」という理念に焦点を当てた。というのはW. デイルタイ（1833－1911）やオルテガなどに代表される生の哲学者たちは、歴史上の変化を直観的に感じ取る鋭敏な感受性を有した人間とその世代に、歴史的变化の源泉を求めるからである。

さて、世代とは一般的には歴史上の同一の時代を経験することによって、共通の心理的構造をもち、類似の社会的行動様式を身につけた一群の同時代人を指す。したがって世代とは親子などの縦の関係でも個人的な関係でもなく、ほぼ同じ時代に育った同時代人の横の関係を言うのである。自然的生物学的には

一世代は約30年を意味し、一世紀は三世代によって経験・構成される。一世代を決定する基準は当人が出生後その子供が誕生するまでとする説、成長後親の仕事を習得するまでとする説、親の仕事を継いで子供に譲るまでとする説など、諸説がある。社会学の始祖とされるA. コント（1798－1857）は世代は自然的な連続の過程であり、歴史の進歩は世代の連続的影響から生じると言っている。世代の歴史的側面に注目したディルタイは、感受性鋭い青年期における歴史的大事件との出会いによって共通の影響を受けた世代に注目し、これが同一世代内の各人間にその差異にもかかわらず同質的な全体的同一性を保持していることを指摘した。たとえば1789年のフランス革命は当時青年期にあったG. W. ヘーゲル、K. W. フンボルト、F. H. ノヴァーリス、F. ヘルダーリンなどに同一体験を与えたのであった。また、K. マンハイム（1893－1947）は世代はその共通する社会的基盤という世代状況のなかで、共通の歴史的社会的宿命に参与するという世代の関連性を有しつつ、最も統一的な全体として社会的歴史的に重要な役割を果たすと言う。J. J. ルソー（1712－1778）の言う「第二の誕生」とは、世代の社会的側面、とくに世代における青年期の重要性を強調した言葉である。すなわち「私たちは言ってみれば二度生まれる。一度は存在するために生まれ、一度は生活するために生まれる」と言うのである。人間の第二の誕生としての青春は、先行の大人たちが彼らに押し込んだ社会的鑄型・行動様式から跳躍しそれに対決・挑戦する社会的危機の時期である。とくに当該の世代が属する社会自体が先代の世代には解決不能な歴史的な危機に瀕しているとき、それが青年世代の社会的危機と重なり合い、その新しい世代が歴史に積極的な意味を有した役割を担うのである<sup>2)</sup>。

## (2) オルテガ世代論

さてスペインの哲学者オルテガも世代について、独自の見解を有している。オルテガの場合はとくに、世代という概念をもって同時代のエリートに歴史的使命を担わせるところに特徴がある。オルテガの研究者J. オセース・ゴライスによれば、オルテガの世代のテーマは大衆と選ばれた少数者との間に存在する関係のなかに完全に組み込まれている。他方、世代のテーマは社会的慣習の概念から切り離すことはできない。最終的にはオルテガの世代の理論は歴史－社会的なるもののオルテガ理論を超える一つの章としての意味をも有し、それゆえにその理論は①根本的現実、②仕事、③個人的ドラマとしての生の一般的な哲学概念に基礎づけられるものでもある。このことはオルテガが1923年あたりにはすでに世代についての社会的・哲学的思想の輪郭を、完璧と言えるほどには体系化していなかったとしても、かなりの程度達成していたことを意味する。オルテガにとっては生とは人間の間の共生である。この共生とは自然と、多数者の従順な受容性に対応する少数者の模範的行動の上に形成される。選ばれた少数者は20世紀の4半世紀のスペインで実際そうであったように必ずしも時代の高さにあるわけではないが、歴史的变化の主要な要因である。各世代の少数者が彼らの仕事を実行し得るためには、さらに歴史上の挫折した失われた世代にならないためには、いかなる性格を持っていなければならないかを提示しなければならない。そのためにはまず世代を定義すべきであろう。オルテガによれば、「世代とは一握りの著名な人間の集まりでもなければ、単に大衆でもない。一つの世代とは、選ばれた少数者と多数（群衆）とによって成る、まとまりのある新しい社会集団のごときものである。その新しい社会集団は特定の生の計画を携えて存在

の地平に投企する。大衆と個人の間のダイナミックな合体である世代とは、歴史の最も重要な概念であり、歴史上の運動がその上で展開する枢軸なのである」<sup>3)</sup>。

### Ⅲ オルテガ世代論の展開

#### (1) オルテガ作品における世代概念

オルテガによる大衆と少数者の関連性の分析は、現象学的基盤に立脚しつつ人間の歴史上で企図されている。すべての歴史的な時代は一樣とは限らないから、オルテガは歴史が変化の連続であることは自明であるとし、その変化それ自体の正しい理解がわれわれ自身の生を解明するために注意を注ぐべき骨の折れる仕事であると考えている。われわれは歴史研究を通して、われわれ人間が被る諸変化を理解しなくてはならないのである。そのためにオルテガは、「世代」という概念を利用するのである。ゴライスによれば、オルテガが世代という概念について意見を表明した主要な作品としては、1914年の講演『旧政治と新政治』、1917年12月15日のエル・ソル紙上の記事、1923年出版の『現代の課題』、1933年出版の『ガリレイをめぐる』の四点が挙げられる<sup>4)</sup>。以下、これらについて検討してみよう。

#### (2) 1914年・1917年の世代論

「世代」の概念はまず、1914年3月23日のコメディア劇場での講演『旧政治と新政治』で現われた。当時の世代概念は歴史的意味合いを含んでいなかったが、オルテガはスペインの再生の重荷を背負うように、スペインの新しい世代に呼びかけた。これによって、その教育—政治的プロジェクトが果たされることを期待したのである<sup>5)</sup>。しかし世代という用語は、1914年ではまだ理論と呼べる域に達していなかった。そこで次に参照しなくては

ならないのは、1917年12月15日のエル・ソル紙に載った、グメルシンド・デ・アスカーラテ博士の死についての匿名記事である。この記事のなかでオルテガは、世代概念をさらに輪郭づけている。「生の相貌は各世代とともに変化する。世代のそれぞれは一つの特異な感受性を有し、思考と感性の生得の傾向性を備えている。こうして、各世代は他と異なった仕方でも事物を評価するようになる」。しかし1923年発刊の『現代の課題』ではオルテガは、世代概念を歴史的出来事を理解するための鍵に彫琢するべく深い分析を行なっている。さらに後年の1933年出版の『ガリレイをめぐる』においても、再び世代のテーマを論じている<sup>6)</sup>。

### Ⅳ 『現代の課題』（1923年）の世代論

オルテガが世代の概念について比較的詳しく論じたのは、『現代の課題』の第1章「世代の概念」と第2章「未来の予見」、さらに『ガリレイをめぐる』の第3章「世代という理念」・第4章「歴史における世代による方法」・第5章「世代という理念についての再説」の各章である。まず『現代の課題』においてオルテガは彼が哲学思想を陳述するときいつもそうであるように慎重に、世代の概念に接近していく。

#### (1) 「世代の概念」

オルテガは第1章「世代の概念」においては次の5点について重要な議論を展開しているように思われる。それらは①選良の少数者と大量の多数者の動態的合体たる「世代」という歴史的枢軸、②歴史的変化における「生の感性」に起因する「世代の形式」の変化の決定的要因、③一世代内での共通性・類似性のなかでの「選良者と凡庸者の区別」、④歴史上の各世代に固有の「生の高さ」・「ユニー



クな相貌」とそこにおける「最も価値ある要素」と「最も平凡な要素」の同時存在、⑤各世代の生の課題の二次元性、さらに「老人の時代」を生きる累積的世代と「青年の時代」を生きる創造的闘争的世代の区別である。これらの議論を解明することによってオルテガは、「世代」概念の内実を探究するのである。

①まずオルテガによれば、歴史上の「産業や政治の変化」は「同時代のもつ道徳や美的情操における観念とか好みとかに依存」し、さらに「このイデオロギーや趣味や徳性」も「生の実存の中に起きてくる根本感情、不可分の一全体における根本的な生感情」である「生の感性」(sensibilidad vital)から湧出する。オルテガは「歴史の変化に対する歴史哲学」として、歴史的変化を惹起する要因を人間集団とする「集団主義的解釈」と、英雄や天才のごとき「法外な人間」が歴史を変化させるとする「個人主義的解釈」を挙げ、両者による「歴史過程における本質的な二元性」を指摘する<sup>7)</sup>。

その上でオルテガは、「歴史において決定的な意味をもつものは生の感性の変化であって、それは世代の形式をとって現われる」と主張する。彼によれば「世代」とは上述の歴史過程における二元性を反映して、「少数のすぐれた人間のことでなければ、また単に多数の人間のことでなく、両者の「統合された一つの別の社会体」であり、「選良の少数者とすでに生の軌道が決定され生存圏へ投げ入れられている大量の多数者との両者」から成る「大衆と個人との動態的な合体」である。そして「これが歴史における最も重要な概念」であり、「歴史が回転する枢軸」なのである<sup>8)</sup>。

②さらにオルテガは「世代は人間族の変種である」と言う。それゆえ「一世代の構成員は、先立つ世代とは区別された一つの共通の顔つきを見せるという、ある象徴的な特徴を

付与されて世界の中へ入ってくる」。オルテガによれば、確かに同一世代内の個々人は「非常に相違しているので、ときには彼らは互いに敵対者であるかに感ずることさえある」が、「賛同者と反対者の対立がいかにげいときでも、その背後に、態度の共通性」があるのであり、「同時代の人間であるから、彼らの相違がいかに大きくとも、彼ら相互の類似のほうそれがそれ以上にもっと大きいのである」<sup>9)</sup>。

③オルテガの主張するところ、「一世代の圈内において、賛成、反対の対立よりもっと重要なのは、選良者と凡庸者との間につねに存するへだたり」である。「地形学における平均海面」のごとき、一世代内の「あらゆる個人に同一の出発点、共通線」を前提にすれば、「この共通線を高く抜きんでている者と、それからわずかしかが上がっていない者」とが存在するということなのである。オルテガの観察するところ、「実際、いずれの世代も生の或る高さを明示している。その高さからして生存の一定のあり方が自覚される」のである。したがって、「一民族の発展をその全体関連において」考察すると、「メロディーの展開におけるそれぞれの音符」のように、「各世代は民族の生活過程の一時点として、あるいは民族の歴史的潜在勢力の一脈搏として出現している。そしてそれぞれの脈搏は独自の、ユニークな相貌をそなえている」。すなわちその各世代を「一定の瞬間に、あらかじめ定められた力と方向とをもって空中に投げ出され」た「生物学的な射出物」と想像するならば、「射出物の最も価値ある要素」と「最も平凡な要素」とが同時存在するということなのである<sup>10)</sup>。

④さらに実際の歴史上での世代の変遷過程をたどれば、「新しい世代は先行の世代がその生存に与えていた諸形式をもうすでに見いだ

しているというふうにして、諸世代は連続的に前の世代から生まれる」という在り方を示す。すなわち「各世代にとって、生きるとは二つの次元をもった課題」なのであり、その一つの次元は「先行の世代によって生きられたものを、すなわち諸思想、諸価値、諸制度等々を継承する側面」であり、他の次元は「当の世代固有の創造的な自発性の側面」である。世代のこの二次元性は根源的には、過去を継承し背負いつつ未来を創造し実現しようとして現在に生きている人間存在の、一瞬一瞬の時間性の本質に由来している。前者の次元では、「他者によって作られたもの、終了という意味で完成され実行されてきたもの」は、「それ独特のもったいぶった表情でわれわれの前へ出てくる一神聖化されたもののように現われる」。かつそれは「われわれ自身が作り上げたものではないからして、われわれはそれを誰の所有にも属さぬ作品であると思ひやすい、したがって、実在そのものであるとさえ思いがちである」。たとえば「教師たちの意見が特定の人の意見だとは思われず、匿名で地上に降りてきた真理そのものであるかに見える」のである。しかしオルテガによれば「世代は、自己が外から受容したものに対するのと同じ態度で、自己自身のものに臨むことはできない」。したがって後者の次元では、「われわれ自身の能力で考えるもの、感ずるもの、要するに自分の自発的な感性は、完結し完成したもの、限定された事物のように固定したものとはどうしても思えない」。

「われわれの感性は抵抗力の弱い内奥の流れ」であるが、「この弱点は、より強力な養分によって、また自発性という自己本来の特性に適合することによってつぐなわれる」のである<sup>11)</sup>。

⑤オルテガによれば、「各世代の精神は、上述の二側面の要素が形成する方程式に、当

該世代の大多数の個人が両者のいずれかへ向けてとる態度」、すなわち「自己の内奥の自発的なものの声に聴従せず、継承したものに身をまかすか」、それとも、「自発性に忠実に、従来のものの權威に対しては不従順になるか」の「その態度に依存する」のである。前者の「相続したものとそれ自身のものとの間に完全な同質性が感ぜられた世代」は、「累積の時期に生き」、「青年は老人と連合し、老人に服従する、つまり、政治においても科学においても芸術においても、老人が支配し続ける」「老人の時代」を過ごすのである。一方、後者の「上の二要素の間に深い異質性を感じた」「闘争的世代」は「排除と論争の時期」に生き、「古い者は若い者に掃き捨てられ」追放され取り換えられる「青年の時代」、「創造的闘争の時期」を送るのである。かくしてオルテガは「臨床医学に対して」「生理学」がもつ関係に例えて、「具体的な歴史学に対して」「基礎歴史学metahistoriaと呼び得るような一つの新しい科学的学科」を提唱し、上記の「老年の時代と青年の時代とが交替してゆくりズム」のみならず、「男性の支配的影響のもとに服した時期」と「女性の影響下に従う時期」のような「性的リズムのごときもの」の探求をも示唆するのである<sup>12)</sup>。

## (2) 「未来の予見」

さらにオルテガは第2章「未来の予見」においては、次の8つの論点を提示し考察していると思われる。すなわち、①歴史上の各世代の「時代的使命」、②九十度方向転換している現代の世代の使命、③歴史における明確な構造と軌道の存在、④人間的生や歴史の内的発展性、⑤歴史における「心理学的必然性」の探求、⑥時代の解剖学的組織と政治の副次的機能、⑦少数者の二つの類型としての「行動の人間と観照の人間」さらに「科学・学問

の先見性」、⑧政治の時代遅れと学問の先行性について洞察することによってオルテガは、各世代がいかにして次の未来を予見するか、に答えようとする。

①彼は歴史上の「どの世代にもそれ特有の召命があり、歴史的使命がある」と主張する。「どの世代に対しても、その内部の種子を発芽生長させ、それ自身の自発性の型に応じて周囲の存在に形を与えよ、との峻厳な命令が下されている」と言うのである。というのは「一世代の本質をなすものが、感性の独特のタイプであり、深部に根づく諸傾向の有機的なレパートリーである」からである。しかしながら、「自己自身に不誠実となり、自分に託されている歴史的意図を裏切るような世代」が歴史上には存在する。「個々人においてみられるように」、「その召命に背き、自己の使命を果たさずにいる」「世代は、自分に指定された事業を断固始めようとの決意をせず、自己の奥底から迫ってくる召命の呼び声に耳をかさず、先行の諸世代によって創り出された、しかも自分の体質に合わないところの思想や制度や享樂の中に身をゆだねて寝ころんでいるのをよしとする世代」である。「この罪深い世代は自己自身とのたえざる分裂の中で、生命本質の碎かれたその存在をだらだらと引きずってゆく」のである。オルテガはこうした「逃亡者の世代の一つ」として、「スペインの現在の世代」を挙げるのである。彼はこの世代を「人類が自己に適合しない生活形式を、その内的リズムと一致しない他の世代の残存物を、かくもたやすく耐え忍んだこともおそらくかつてなかった」世代とまで酷評している<sup>13)</sup>。

②ところでオルテガによれば、「われわれの世代は、われわれに共通の使命の呼び声を聞き誤ってはならないとの決意を深くいただいている」。しかも「現代における西洋の感性は

少なくとも九十度は方向転換している」と言うのである。オルテガによれば、「われわれ同時代人の誰の政治的立場」も、「すでに、かつてわれわれの教師であった人たちからわれわれが受け取ったある思想によって規定され」、「その思想は一八九〇年ごろには充分な成熟に達していたもの」なのである。しかも「人びとはその相続した思想体系が時代の自発性と一致しないのを再三再四気づいて」いるはずなのである。それゆえオルテガは「われわれの時代の使命は、自由主義になることでも保守主義になることでもなく、まさにその古くさい一組の対立を度外視することにある」と主張するのである<sup>14)</sup>。世上より一世紀も先んじるオルテガの先見の明に敬意を表して、1920年代にオルテガの言わんとしたところを21世紀の現代の政治状況に当てはめてみれば、現代政治における保守主義・自由民主主義と革新主義・社会民主主義という、「近代」理性主義に由来する一組の対立するイデオロギー枠組みを超越して、「近代の後」の生・理性主義に奉仕することこそ、現今の時代の要請する使命であるということになろう。

③オルテガによれば、「個人の運命の場合と同様」に、「歴史はどんな予見もできないようなまったくの偶然事の連続ではない」。「近接する未来に特徴的な思想を予見し、われわれの次に続く時期の一般的輪郭をあらかじめ描くことは完全に可能」であり、「一時期の内部には無数の予測しがたい偶然事が起こる」が、「その時期そのものはなんら偶然のものではなく、定まった明確な構造を所有している」のである。人間個人の場合、「自分の性格や欲求や活動力がどのようなものか」を理解しているから、「身にふりかかってくる偶発事に対しどういう仕方ですら反応するか」もわかるし、「いずれの生も、あらかじめ定められた大筋の軌道をもっている」のである。

あとはその軌道に「うねりとくぼみ」を与えればいいだけである。オルテガは「歴史家は逆の予言者である」というシュレーゲルの言葉を挙げて、「歴史の仕事はそこに予言が可能である度合に応じて科学的になるのである」と言っている。また「歴史的感覚が鋭くなれば、予測の能力もまた増大するのである」と言っている<sup>15)</sup>。

④オルテガは「生は法則によって統べられた事実の総体」であり、「人間存在は本来生である、すなわち、発展の法則が遂行される内的過程である」と言う。したがってたとえば、「ローマ民族」の歴史的展開は、「時代の中でしだいに展開してゆく生の諸傾向の一定の集積」にほかならないのであり、「この発展の各段階にはすでに次の展開相が内在している」のである。オルテガの考察によれば「人間の生」も、「内部に動機づけをもつ過程であって、その本質をなす諸事件は外部から主体一個人であれ民族であれ一の上に落ちかかってくるのではなくて、種子から花や実が生ずるように、主体から生ずるのである」<sup>16)</sup>。

⑤オルテガは、「われわれが一つの状況を歴史的に理解し得るのは、それを、それに先立つ他の状況から必然的に起こってきたものと見るときである」と言う。「人間の生は顕著に心理的生」だから、このときの必然性とは物理学的、数学的、論理的必然性ではなく、「心理学的必然性」なのである。したがって、「未来を予言するときわれわれは、過去を理解するのと同じ知的作用を行使している」のである。「後方へか前方へかの二方向において、一筋の明白な心理の曲線を追求しているだけなのである」。それゆえ、「われわれが自分の心情の中へ沈潜して、個人的な熱望、私的な偏愛、偏見、願望のいっさいを排除し、われわれに本質的な欲求と傾向の方向線を、これ

らが生の一類型に凝集するのを見届けるまで延長してゆくならば」、過去を理解し未来を予言できるのである<sup>17)</sup>。

⑥オルテガに見るところ、「諸時代の胴体はそれぞれ一つの序列づけられた解剖学的組織をなしており、そこには、一定の基礎的活動とそれから派生する副次的活動とが存在する」。それゆえ、「政治はそれが自余いっさいの生活現象の単なる帰結であるという意味では歴史的生の最も副次的な機能の一つ」であり「大衆間の引力的相互作用から生ずるものである」から、「ある精神状態が政治運動を色づけるまでになった場合は、すでにその精神状態は歴史的有機体のすべての機能に影響を及ぼしているのである」<sup>18)</sup>。

⑦ところで、「歴史的意識の変様が大衆にまで及んでゆくためには、それは先んじてまず、選良の少数者を動かしていなければならない」。オルテガによれば、この「少数者の成員には二つの類型」、すなわち「行動の人間と観照の人間」がある。「まだ萌芽の状態で弱いものだとしても新しい傾向は、行動的精神によりも観照的精神により早く知覚」され、「行動的人間は緊急の仕事にはばまれ、実践の帆をはらませないような定かならぬ微風は感ずることができない」のである。そしてオルテガの観ずるところによれば、「静かな水面に生じたばかりの微風がおこすさざ波」のごとき、「生じきたる時代のかすかな最初の兆候」が探知されるのは、「人間における最も流動的な」部分である「純粹な思惟の領域」においてである。そうした思惟の領域こそ「科学」や「学問」であり、「未来の兆候をとらえるために注視しなければならない魔法の器」なのである。「今日の生物学、物理学、社会学、先史学が、とりわけ哲学が試みつつある諸改変」は「明らかに新しい時代を準備する最初の身ぶり」であるし、また「学問に



における非常にデリケートな資料」も「年月の経過とともに公共生活の舞台に巨大に映し出されてゆくでもあろう現象を、現時点において、ごく小規模に記録する役目を果たす」のであり、それゆえ、われわれはこうした科学や学問という、「地震計」にも似た「精密機械でもって未来を予測することができる」、とオルテガは指摘するのである<sup>19)</sup>。

⑧したがって、「われわれの世代は、現在の政治に粘着せず、今日の学問の一般的特徴の中でその方向を見定めなければならない」のである。上述したごとくオルテガの見るところ、「現在の政治はまったく時代遅れになっており、死んだ感性の反響にすぎない」のである。彼は「明日開かれる市場でどう生きるかは、今日思考し始めていることから定められる」と言明するのである<sup>20)</sup>。

## V 『ガリレイをめぐる』(1933年)の世代論

1933年に発刊されたこの『ガリレイをめぐる』の第3章から第5章の各章においてオルテガは、さらに明確に「世代」の概念内容を規定していく。この著でオルテガはこれまで考え追求してきた「人間的生」の思想、「生・理性」の哲学から必然的に、歴史的変化を生み出す「世代という理念」を導きだしていく。

### (1) 「世代という理念」

まずオルテガは第3章「世代という理念」で、人間的生の思想を簡便に要約しつつ、そこから「世代」理念の必然性を指摘していく。彼は「本質的にドラマそのもの」である「生きること」(人間的生)が、「われわれの身に起こり、ふりかかる」からこそ、「われわれの身に起こり、ふりかかる他の一切のことも、われわれの身に起こり、また、ふり

かかってくるのである」と言う。したがって「われわれが生きていないとしたら、なにごとともわれわれに起こらないであろうし、反対に、まさにわれわれが生きているからこそ、他の一切のことも、われわれに起こるのである」と言う。ところでオルテガによれば、「この唯一無二の、本質的な、他の一切の出来ごとの原因となる『出来ごと』、すなわち生は、きわめて注目すべき事情を必然的にともなっている」。すなわちそれは、「生の遂行をさまたげることがつねにわれわれには可能である」ということである。とすれば、「われわれが生きようと欲するからこそ、生きるということを本質的な出来ごととして受け取るのであれば、われわれに起こる他の一切のことは、たとえどのように厭わしい、絶望的なことでも、われわれが欲するから、すなわち、われわれが存在することを欲するから、われわれの身に起こる」ということが明白となる。それゆえ、「人間とは、存在にたいする憂慮ないし関心である。存在し、存続しようとする、のっぴきならない憂慮・関心であり、かく存在しようとする憂慮、自己を、最も固有な自我を実現しようとする憂慮である」とオルテガは主張する<sup>21)</sup>。

ここからオルテガは人間存在の次の二側面を見出す。第一に人間は「存在にたいする憂慮・関心が運命であるような、存在にたいする憂慮・関心から成っているような存在者」であること。第二に人間は「その存在に確固とした自信がない者、つぎの瞬間に存続するかどうか、どういうありかたでどういう者になるかをたえず疑問におもっているような者」であること。人間のこれらの側面からオルテガは、われわれの生が「その核心において根本的に不確実」であることを確認する。その上でオルテガは「人間はわれわれの生を確実なものにするために、たえずなにかをす

るのである。とりわけ、われわれがやむなくそのなかに存在する状況の解釈とこの状況のなかで生きようとするわれわれ自身の解釈とをしようとする—つまり、われわれは、われわれがその境界内で生きなければならない視界の見取図をつくる」のであると指摘する。すなわち彼によれば人間は、「みずからの力で現実性を、確信を創造することによってこの根本的な不現実性に答えをあたえる」のである。「世界がこれこれしかじかのしかたで存在することを信じ、それによってみずからの生をととのえ、生きる」のである<sup>22)</sup>。

かくして、人間は、「勇気と個性と行動力をもって、不断に世界を創造」している。「世界ないし世界観は、人間が生を処理するために考えた見取り図あるいは解釈」そのものである。したがって、「世界は言葉の真の意味において人間が製作する道具」である。さらに、「この道具を製作する」ことは「人間の生、人間の存在と同一」であり、「人間は生まれながらの世界観製作者」であると言える。そしてオルテガによれば、「人間の生、かれの生のドラマ」は、「かれの諸問題の視界がどのようなものであるかに応じて、また、かれの世界に具体的な形をあたえる安全と危険との方程式がどうであるかに応じて、それぞれまったく異なった特定のプロフィールをしめす」のである<sup>23)</sup>。

さて以上の「人間の生」についての考察からオルテガは、「歴史叙述の見取図」を描くために、二つの根本原則を打ち出す。第一に、「人間は、不断に世界を創造し、視界を獲得する」こと。第二に、「世界およびその視野のすべての変化は、必然的に生のドラマの構造に変化をもたらす」こと。すなわち「生きている心的生理的個体、すなわち、人間のたましいと肉体は、変化しないかもしれ」ないが、「人間は、たましいと肉体ではなく、生

であり、生の問題の肖像であり、表現である」から、「その生は世界が変わった以上、変化をする」のである。だから「歴史のテーマは、有史以来人間の生がもっている形式と構造の研究と正確におなじ輪郭を有してきた」のである。これらの原則からすれば、歴史叙述は個人的生のみならず、集団的生をもあつかい、さらに「時代感覚」や「時代精神」などの「集団的思想の世界は、個人的確信の世界がもたない、まったく特殊な性格を有している」のである<sup>24)</sup>。したがってオルテガによれば、「時代感覚や一般の理念というものは、特定のだれでもない、たんに社会といわれるにすぎない匿名の個体の所有物」である。しかもまた「時代精神と時代感覚は、すでに大部分わたし自身の内部にあり、わたしの思想財産にぞくしている」。「人間は、生まれたときから時代の諸確信をみずからの内部に摂取する。換言すれば、一般に通用している世界と知り合いになるのである」。こうしてオルテガは世界像の変遷や人間的生のドラマの構造の変化などの「歴史上の真の変化」の解明のために、①人間の生の変化・交替による世界の歴史的变化、②「三段階の世代」と「歴史の時代錯誤（内的平衡障害）」、③世代における「時間的統一と空間的統一」、④世代による過去・歴史の現在化・現実化、⑤「日づけ帯」としての年齢、⑥3分法・4分法という年齢の理論などの諸点について以下のように論じ、「世代という理念」を打ちだすのである<sup>25)</sup>。

①まず、オルテガは「世界の構造における一切の変化」を、「人間たちが死に、新しい人間たちが生まれてくるということ一生が交替する」、つまり「あらゆる人間の生は、本質的に前の生と後につづく生とのあいだに位置づけられている」、すなわち「人間の生は、ひとつの生から出て、べつの生に移っていく」という「避けようのない必然性」に基礎づけ

る。換言すれば、「歴史的变化というもの成り立つ根拠とその時期は人間存在と本質的にむすびついている」と考えるのである。しかも、ディルタイやハイデガーが明言しているように「生とは、時間」であり、「この時間は、想定上の宇宙的な時間でもなければ、したがってまた、想定上の無限時間でもなく、かぎられた時間、終末のある時間、それゆえ、現実の時間、とりかえしのできない時間」である。それゆえオルテガによれば、「生涯の始まり、成年への成長、生涯の盛期、終局への下り坂」あるいは「子供、青年、壮年、老人」というように、「年齢とは、人間がつねにかぎられた時間のなかの一定の時点に立っていることを意味する」のである<sup>26)</sup>。

②しかもオルテガによれば、このことは「すべての歴史的現在、すべての『今日』は、根本において三つの異なった時間、三つの異なった『今日』をふくんでいること」を意味する。「『今日』とはある人にとっては二十歳であり、べつの人にとっては四十歳であり、第三の人にとっては六十歳」である。そして、「三つのこれほど異なった種類の生が同一の『今日』であらねばならないというこの事実は、歴史と時間にしばられた、一切の共同生活との原理を規定しているあのダイナミックな過度の高揚への傾向と葛藤と激突とを十分に説明している」。たとえば「1933年には、青年と壮年と老人が生きている」ように、「ひとつの歴史的時点のなかに三つの異なった年齢段階が統一されているのである」。しかしこの三者は「それぞれ異なったしかたでこの世界の形成に寄与している」。オルテガが歴史叙述において同時代 (contemporáneos) と同年配 (同世代、coetáneos) との絶対的な区別を要求するのはここから来ている。「三者は、同一の外的年代記的時間のなかに住んでいるが、しかし、三つの異なった生の時間を生きて

いるのである」。オルテガが「歴史の時代錯誤」<sup>アナクロニズム</sup>と呼ぶ、歴史に本質的に内在しているこの「内的平衡障害のおかげで、歴史は動き、変化し、変転し、推移するのである」<sup>27)</sup>。

③それゆえオルテガは、「世代」を「現在の共存生活という輪のなかで同年齢である人びとの総体」と定義する。そしてこの「世代という概念」は「同年配であることと、生きた接点をもっていること」という、二つの基本的事実を前提としているのである<sup>28)</sup>。ここからオルテガは「世代の最も重要な徴表」として、「時間的統一と空間的統一」を挙げる。すなわちまず第一に、「すべての世代が歴史的時間の一局面をあらわしているということ」は、「ちょうど歌曲の音符が先行音符の調べにしたがうのとおなじように」、「もろもろの世代がかなでるメロディーがつぎつぎに踵<sup>きびす</sup>を接してつづくということ」である。第二に、「世代は、おなじように空間的な局面としてもあらわれる。どのような時点においても、人間の共同生活の輪は、多かれ少なかれ空間的な拡がりをもっている」。世代におけるこの「時間的統一と空間的統一」が「いっしょになって、ほんとうの運命の共同体を形成する」のである。「運命のこの本質的類似性は、同年配者のなかに、かれらの生の特徴の類似性としてあらわれる第二義的な一致を成立せしめる」のである。したがってオルテガが世代を「隊商」(キャラバン)に例えたように、「ある世代にぞくしている」ということは、「生の全領域に影響をおよぼし、個人の消しがたい刻印を捺しつける存在の鋳型」を意味するのである<sup>29)</sup>。

④オルテガは、「世代という理念」によらない「一切の試みは、それぞれの時代における人間の生の真の現実を発見すること—これこそ歴史叙述の課題なのだが—を断念すること」を意味する」と言明する。「世代という理

念による方法は、この生を自分自身の内部から、現実には密着したその有効性において見ることを可能にしてくれる」。彼によれば「歴史は、すでに過ぎ去ったものを実際に現在のなものに変えようとする」営みであり、「歴史を書くとは、過去をよみがえらせることである」から、そしてまた「生は時々刻々の現実であり、現在以外のなにもものでもないから」、「われわれは、現在から過去へ移り住み、かつてあったものを外からではなく、既往としてではなく、現に在るものとして観察しなくてはならない」のである<sup>30)</sup>。

⑤オルテガによれば、「年齢は、もともと日づけではない」のである<sup>31)</sup>。それゆえ、「年齢は、人生行路のなかでの人間の一定の生きかたである」、つまり「ちょうど生が始まり、生が終わるように、若いということが始まり、若いということが終わる」のである。「それぞれの年齢がそれであるところのこの生のありかたは一生きた時間ではなく、宇宙的時間の経過によって、つまり、時計ではかる時間によって外面的にはかるとすれば一何年間にわたっている」。「一定の年数のあいだ若いのであり、また一定の宇宙的時間のあいだ中年なのである」。したがって、「年齢は、日づけではなく、『日づけ帯』」である。それゆえオルテガに言わせれば、「生の、歴史の観点からみれば、おなじ年齢をもっているのは、おなじ年に生まれた人たちだけでなく、一定の日づけ帯のなかでこの世に生を享けた人びと」なのであり、「年代記的に厳密な、数学的な年数の経過によって年齢を規定することはできない」のである<sup>32)</sup>。

⑥オルテガの見るところ、人間の「生の段階」に関する「年齢の理論」が、「数学が生をの精神をまだ荒廃させていなかった時代にはるかにさかのぼって古代、中世において、さらにまだ近代の初期においても」、存在した。

シェイクスピアは喜劇『お気に召すまま』で7分法を用い、アリストテレスや『リュクールゴス伝』を書いたプルタルコスは、青年、壮年、老年の3分法を採用している。オルテガは、イソップやグリムに代表されるドイツ民話の4つの年齢段階説を挙げながら、「年齢」という概念がなによりもまず生のドラマの諸段階からつくりだされるものであって、生のドラマの諸段階は、数字ではなく、生のありかただということを実にしめしている」と指摘する。そしてとくに、「三ないし四の年齢別にわけける区分法だけが人間の解釈意欲のなかに確固たる地歩をしめして」おり、「このふたつの区分法は、ギリシアでも、オリエントでも、原始ゲルマン人たちのあいだでも、常例となっていた」のである。かくして、オルテガによれば、世代の「年齢段階とその期間」は、「われわれではなく、歴史的現実」によって決定されるのである<sup>33)</sup>。

## (2) 「歴史における世代による方法」

さらにオルテガは『ガリレイをめぐる』の第4章と第5章で、彼が考案した「歴史における世代による方法」を大略、①「時代精神」・一般通用の確信世界の変化、②「同時代人と同年代人の区別」と、継続する諸世代の論争的・協力的継承、③先行の世代を内蔵する世代の累積的構造的性、④各々15年間続く5つの生の年齢、「五段階の世代」、⑤「壮年期と熟年期」による真の歴史的時期、⑥「決定的世代」とその名祖、⑦世代確定の個人的不可知性と諸世代の全系列という前提、⑧歴史の「網膜スクリーン」としての世代、「視覚器官」としての世代、歴史の一定時点における「人間生活の構造」としての世代など8点にわたって以下のように詳述している。

① オルテガの言う「確信から成る世界」とは「時代のすべての人間の共有財産」であ



り、「時代精神」、「一般通用の世界」でもある。彼によれば、「人間が運命によってあてがわれた肉体をもち、この肉体のなかで、この肉体とともに生きなくてはならない」ように、「時代の諸理念も、人間にとってこの肉体のようなもの」である。「人間は、時代の諸理念とともに一それらの敵としてという例外的な場合もあるが一生きなくてはならない」。われわれが生きるのも、ごく簡単な決心をするのでさえも、「この時代精神のリズム」のにつか、「その関数として」である。一方またこの時代精神は「人間存在の可変的な要素」でもある。「これが変化すると、生のドラマの筋書も変化する」。「人間の生の構造における決定的な変化」は、性格や人種の変化よりもはるかに多く「世界の変化」に左右される。そしてオルテガによれば、「歴史のテーマは、哲学のテーマである人間の生ではなく、生の変遷と推移」であるから、「それぞれの時点における一般通用の世界が歴史の最も重大な因子」である。ところで、「この世界は、世代とともに移り変わる」のである<sup>34)</sup>。

②1914年の講演と1921年の著作で「世代が歴史の根本的概念である」とすでに主張していたオルテガは、1926年に芸術史家ウィルヘルム・ピンダーによって出版された『世代の問題』を評価しつつも「同時代人 (contemporáneos) と同年配人 (同世代人、coetáneos)」の区別を行っていないと批判し、「世代の継起」に関しては「あとの世代はまえの世代の後継ではなく、両世代間の関係は論争<sup>ボレミク</sup>」であると主張している。そしてこの「論争という言葉」は、「各世代の生はまえの世代にたいする戦い」であるなどとする「若い世代の人たちの世代観」を意味するのではなく、その言葉の言わんとする「対決」とは、「けっして否定的な徴候ではなく、むしろ新しいものを形成する世代間の戦いとして歴史の経過のなかに

その自然な表現を見いだす」ことであり、「継承、師弟関係、協力、また、あとにつづく世代によるまえの世代の延長」を意味すると言っている<sup>35)</sup>。

③原始的な歴史家によってイエスが諸世代の系譜に沿って形成される人間の一般的運命の一定の高みに位置づけられているように、「個人は、それぞれの世代に配分されている」。すなわち「われわれの個人的生のなかでは、われわれがいまなす行為、われわれがこの瞬間にそれである存在は、われわれの生存の持続のなかで確たる位置をしめる特定の時間の、否定し去ることのできない一片」であるように、「あらゆる世代は、歴史的な時間の経過の、人類の生の履歴の、本質的な、譲渡できない、かけがえのない構成要素」である。それゆえ、「人間は、本質的に歴史的である」のである。「人間の運命の現在、われわれがそこに生きている現在、より正しくいえば、われわれがそれであるところの現在、つまり、われわれの個人的生がいまあるようにあるのは、爾余のすべての現在、他の一切の世代がその上にのしかかっている」からである。「それぞれの人間の世代は、すべての先行する世代を内に蔵しており、人類の歴史からのひとつの抜粋のようなもの」である。同様の意味において、「過去が現在であり、われわれが過去の総括」である。「われわれの現在、この過去の素材からつくられ」、それゆえ、「この過去は、現存しており、現在あるものの内臓であり、はらわた」である。だから、「新しい世代が古い世代を歓呼するか嘲笑するかは、根本的には本質的な問題ではない—新しい世代は、古い世代を歓呼しようと嘲笑しようと、それを内に蔵している」のである。つまりオルテガによれば、「世代の継起」は「水平ではなく、人間のピラミッドをつくるサーカスの曲芸師たちのように垂直に、ひとつのも

のが他のものの上にある」ということである<sup>36)</sup>。

④そこでオルテガは、「人間の生は主語であり、他の一切のものは形容詞」であり、「人間はドラマであり、運命」であるという「人間というものを考察するさいの本質的な確認」を行った上で、「生とはわれわれになすべく課せられた責務以外のなにものでもなく、人間は「生の課題を解決して生きるよりほかどうしようもない」ゆえに、「われわれの生の課題を区切る<sup>マイルストーン</sup>」である「年齢段階」の設定の必要性を指摘する。彼によれば、「それぞれの年齢は、特殊な課題をもっている」のである。最終的にオルテガは5つの段階—（1）幼年期（2）青年期（3）壮年期（4）熟年期（5）老年期—に人間の年齢を区分する。まず「最初の時期」は、人間が「そこに投げ込まれ、そこで生きなければならない世界と親密」になる「幼年期および三一歳にいたるまでの肉体的青春期」である。また「少年と老人は、ほとんど歴史に参与しない」。「老人は、けっして参与しないし、少年の参与は、さして大きなものではない」し、「青年期の初期にも、歴史への積極的な参加があるとはいえない」。「青年初期の歴史的、公共的役割は、まったく受動的」である。この時期は、「少年は、学校と職場において学び、兵役に服」し、「少年と青年にとって活動的な生は、さしあたり歴史的なものの敷居をまたぐことはなく、個人的な成長にかぎられている」ゆえ、「生のいちじるしく自己中心的な時期」である<sup>37)</sup>。

⑤したがって、「歴史的現実には、いつも三十歳と六十歳のあいだの人びとの生を基盤」としている。オルテガの見解によれば、「歴史的現実の大部分は、それぞれがおおよそ十五年間つづく、ふたつの異なった生の発展段階にいる男たち」によって担われる。「三十歳

から四十五歳までは、成長し、活動し、戦う期間」であり、「四十五歳から六十歳までは、権力と支配の期間」である。後者は、「みずからが創造した世界に生きて」おり、前者は、「まず自分の世界を創造しなければならない」。「これ以上に対立的なふたつの生の課題、これ以上に異質なふたつの存在の構造を想像することは、まったく不可能」である。悖理的（パラドキシカル）におもわれるのだが、「このふたつの世代において」肝要なことは、「両者が同時に歴史的現実に参加し、しかも、両者が公然と、あるいは<sup>おんみ</sup>隠密に<sup>しのぎ</sup>鎬をけずりながらたがいに優位を争っている」ということである。したがって、大事なことは、「両者が交替するのではなく、逆に、両者がいっしょに生き、同年配ではないけれども、同時代人である」ということである。だから、「世代というものを理解するにさいして決定的なこと」は、「世代が交替するのではなく、交叉し、かみあう」ということである。「つねにふたつの世代が、全力をつくしておなじ問題とおなじ事柄の形成に同時に働いている—しかし、ちがった年齢層の精神でもって、したがって、それに付与する意味も異なっている」ということである。それゆえ以上からして、「歴史的意義という立場から確認できることは、男性の生はそれぞれが十五年間つづく五つの生の年齢に分けられる」ということである。そしてオルテガの見るところ、「真の歴史的時期は、ふたつの成熟した年齢段階、すなわち壮年期と熟年期」であり、歴史的世代は、「十五年間は胎動のなかで、十五年間は指導のなかで生きている」のである<sup>38)</sup>。

⑥以上のごとく「哲学的思考と科学的操作」という「ふたつのメス」によって、世代の理念と方法のテーマを料理してきたオルテガは、この世代による歴史分析のモデルとして「近代」という時代の黎明期をとり上げ、その時

代の「決定的世代」と「決定的世代の名祖」<sup>なおや</sup>を摘出する。オルテガによれば「近代というものの方向を決定するこの成熟の時期」は疑問の余地なく「一六〇〇年から一六五〇年までの時期」であり、「この時期の決定的な諸特徴を確固たる明瞭さでしめしてくれる人物」は異論の余地なく「デカルト」(1596－1650)であった。オルテガがデカルトを「決定的世代の名祖」と確定したのは、デカルトが「かれがあたえた新しい生の形式の輪郭を最も成熟して、最も自覚的に、最も完璧にえがいた」「決定的に、無条件的に変革者」であったからである。「あとは数学的な自動操作の問題」で、デカルトが三十歳になった日付が一六二六年であるから、これを「デカルトの世代の日づけ前後の他の世代を確定するための起算点」として、「あとは、十五年の年数を引いたり、加えたりしさえすればよい」のである。そしてデカルトの世代自体を確定するためには、デカルトの三十歳になった一六二六年が「決定的な世代に相応する年数の帯の中心点である」から、「この世代には、この時点の前後七年のうちに三十歳になった人物たちがぞくする」ことになる。また一五八八年生まれの哲学者ホッブス(1588－1679)が三十歳になったのが一六一八年で、「デカルトの三十歳と八年のひらき」があるから、「デカルトの世代の境界に立っている」ホッブスは「数学的自動操作」によって「あっさりとまへの世代に組み入れ」られることになるのである<sup>39)</sup>。

⑦以上がオルテガの世代論の骨子であるが、彼は自らの見解に対しての誤解を避けるべく、若干のコメントを述べている。まず「個人的観点からは、人間は、自分の年齢を境界としてひとつの世代が始まるのか、終わるのか、あるいは、この年齢が世代の中心をなしているのか、けっして厳密に知ることはできない」。

このことは、間接的にではあるが、世代という概念の「客観的な、歴史的な、非個人的な性格」を露わにしている。オルテガが論じてきたところによれば、この概念にとって重要なのは、「各世代がふたつの異なった世代のあいだにはさまれてあらわれる」ということ、そして、「そのふたつの世代のそれぞれがさらにべつの世代と隣接し、こうして世代がつぎつぎにつづいていく」ということである。ということは、世代は必然的に「諸世代の全系列を前提」としていることを意味する。したがって、「ひとつの世代に相当する年代的な期間の帯は、系列の全体を規定してはじめて確定」できるのである<sup>40)</sup>。かくしてオルテガは、「われわれがどの歴史的世代にぞくするかをみずからの直接の印象にもとづいて判断することができるのは、われわれ自身ではない」と主張する。彼は「過去から現在にいたる歴史の現実構造のなかで各世代の事実上の順序を確定するものこそ、歴史である」と言い、「われわれの時代の把握のためにすでにいまわれわれが評価できる唯一のことは、生の顔が十五年ごとに変化するという普遍の原則である」と指摘するのである<sup>41)</sup>。

⑧数学的操作によって「諸世代をこのように厳密に配列する」のは、「諸世代がそこに配置され組み入れられることができるかどうか」をしらべるために、われわれが歴史の所与の事実のまゑに近づくのを助ける「網目スクリーン」の役目を世代に果たさせるためである。ちょうど「ふたりの人がおなじ風景をふたつの、わずかに、二メートルほどちがった高さから観察している」ようなものである。したがって、配列をするにあたっては「高さの相違」が問題になるのである。というのは、「生の平面におけるこの相違」こそが、実はオルテガが「世代」と呼ぶものだからである。たとえば、民主主義が存在するようになって

以来、それぞれの世代は、「みずからの諸問題をやむなく異なった立場から観察」しなければならなくなった。むろん、「民主主義を發明した世代は、それを受けついだ世代やそれ以後の世代とおなじ経験をもつことはありえない」。したがってこれらの世代がすべて民主主義的な精神的姿勢と世界観とにぞくするとしても、「民主主義にたいするそれぞれの態度は、異なったものであらざるをえない」のである<sup>42)</sup>。結局オルテガによれば、「世代という理念」は、「歴史的現実をありのままの感動的な純粹さにおいて眺める視覚器官（眼）ともいうべき理念」である。「世代とは一定の時点における人間生活の構造」そのものである。「実際にこれこれ、あるいはしかじかの時点に起こったことを知ろうとするには、まずこの出来ごとがいかなる世代に起こったのであるか、すなわち、人間存在のいかなる形式のなかで起こったのであるかを、確証してかからねばならない」。「同一の出来ごとでも、それがふたつの異なった世代の上に起こると、まったく異なった生きた事実（つまり歴史的事実）となる」。たとえば、「戦争という事実でも、それがいかなる時点に起こったかによって、全然ちがった意義をもつ。そこから人間がまったくべつな帰結を引きだすからである」。それゆえオルテガによれば、「人類に起こったいくたの根底的な変革を世界戦争というようなことで説明しようとするのは、誤りもはなはだしいといわねばならない」。オルテガの洞察するところ、「個々の事実は、たとえそれがこの上もなく大規模なものであっても、それだけではまだいかなる歴史的現実をも説明することができない」のであって、「それをまず人間生活の一定の形式の全体像と関連させなくてはならない」のである<sup>43)</sup>。

## Ⅵ オルテガの世代概念

以上、オルテガの世代論の眼目を検討してきたが、オルテガの研究者はオルテガの世代についての見解をいかに評価しているのだろうか。オルテガの弟子J. マリアスはオルテガの世代論が現代までの世代についての諸学説のなかで世代論の名に値する「最初で、唯一のもの」と評価しているが<sup>34)</sup>、オルテガの研究者C. モローン・アローヨはオルテガ作品に表れる「世代」概念の変遷に注目し、またゴライスは歴史的危機の時期におけるオルテガの決定的世代について以下のように述べている。

### (1) アローヨの見解

まずアローヨは、オルテガの用いる世代という言葉には3つの意味があると言う。この言葉は第一に、血縁・血統の意味で用いられる。古来、人間の生活は祖父母、両親、子供の血縁関係のある3つの年齢集団の共生と見られてきた。ここから社会を各々独自の権利と義務をもった3つの年齢階層に区分することは、容易なことであった。前科学的だが社会学的な意味での、この世代の用法はすでに、オルテガの『旧政治と新政治』（1914年の講演）で用いられていた。第二に世代は、生命主義的な社会学的概念である。オルテガによれば世代とは、模範的な諸個人と周囲の大衆との統一体である。傑出した個人はすぐれた資質によって他の人間に影響を及ぼすから、この意味の世代は、大衆のごとき社会的なるものにおける個人の着生点である。これが『現代の課題』（1923年刊行）に現われる世代の定義である。第三にこの言葉は、実存主義的な歴史的概念として用いられる。『現代の課題』では世代は血縁的な意味や普通の時代感覚の意味内容を保持していたが、『ガリレイをめぐる』（1933年刊行）では世代は人間が到



達した歴史的発展の状態、一つの生の特定の形態を意味し、世代はその生の形態の共生的な主役となった。ここでは個人と大衆との模範的な関係や血縁的な意味はほとんど消滅している。第三の意味での世代の理念は、生の概念から真の現実として定義されているのである<sup>45)</sup>。

## (2) ゴライスの見解

ゴライスに依拠して結論的に言えば、オルテガの世代とは、歴史の主体であり、歴史的諸変化は諸世代の生的感受性がそれを許すかぎり、諸世代を通して連結される。諸世代が歴史的要因であると同時に、世代は社会的・歴史的生の構造そのものでもあるからには、世代はわれわれに社会的生の構造を明らかにするものである。明らかなことは歴史的主体とは少数者を形成するすぐれた要素の各々でもないしまた、社会の構成要素全体でもない。オルテガは歴史のなかで生み出される諸変化について二つのタイプを区別するとき、それを一層明確にする。まず第一のタイプは、世界のなかの何かが変化するだけのとき、具体的な歴史的事実がどんなに重要性を持っても、ある部分的変化が歴史的生成において起こるのみである。その作用はすべての人間とすべての通用性に影響を与えるわけではないゆえに、限られたものとなる。第二のタイプは世界そのものが変化するなら、すなわち慣習の通用性における変容が起こるなら、これは起こるのだが、これは危機の時代にしか起こらないのが常である。オルテガの見るところ、これらの変化の要因＝主役・主体が慣習を変化させ、生的・歴史的基層を設定する世代である。オルテガはこうした世代を「決定的世代」と呼ぶ。この世代は、「人間が信念や世界なしのまま生存している生的状態が前の世代の信念世界や体系に続いていること

で世界の変化が成り立っているとき」、歴史的危機を生み出すのである<sup>46)</sup>。

## VII おわりに

以上、筆者はゴライスなどの研究者によるオルテガの世代論を参照にしつつ、オルテガの世代についての見解を検討してきた。オルテガからすれば、「世代」は選ばれた少数者と大衆という歴史社会の二つの要素を架橋する歴史的・社会的指標であり、またこの「世代」こそが歴史社会の変化を体現する実在なのであろう。社会（あるいは社会システム）における時間性という観点からすれば、「生まれ育った年齢」を基準に設定される世代は、階級、階層、天才、集団、風潮、流行、思潮、思想、運動などの諸概念のなかでも格段に歴史的時間を体現した概念である。とくにオルテガの言う「歴史的危機の時代」において歴史を動かす実在を把握しようとするとき、「世代」概念は古代ローマ後期やルネサンスの時代のような過去の歴史的危機の時代においてもまた、大衆社会状況と呼ばれる現代の歴史的危機においても、さらにまだ見ぬ未来の歴史的危機においても、非常に実り多い歴史変化の実際の過程を浮き彫りにしてくれるであろう。

現時点において今後の日本の方向を洞察してみると、現代日本は相当に大きな変革の時代にさしかかっていると言われる。それは近代からポストモダン時代への変容の時期でもあり、また戦後日本から21世紀の日本への脱皮の時代でもあり、またヨーロッパを中心とした大西洋の時代から南北アメリカ、オーストラリア、日本、中国など東アジアを中核として展開する太平洋の時代への過渡期を意味するのかもしれない。こうした諸文明や国際社会の動向を考察するとき、現代日本は今後いかなる決定的世代像と決定的人物像を期

待すべきなのか。プレモダン時代の「伝統の世代」によって生まれ、「近代」の「理性の世代」によって世界に向かって飛躍してきた日本の将来は今後のポストモダン時代には、心の、「人格の世代」によって担われねばならないのではなかろうか。オルテガが世代論を論じるとき最も顕著に決定的人物のモデルとして挙げたのは近代哲学の嚆矢たるデカルトであったことを考慮すれば、ポストモダンの曙を代表する決定的人間像はいかなる人物なのか。おそらくポストモダン時代の先駆けとなるそうした人間はデカルトが中世思潮から遠くかけ離れた理性人であったように、理性主義・合理主義の「近代」思潮とは全く異質の、「神秘」的とも言える性格をもった人物なのではなかろうか<sup>47)</sup>。ともあれ、こうした前の世代と後の世代を前後裁断するような歴史的危機の時代には、たとえば「近代」から「ポストモダン」時代に移行しつつある現代大衆社会においては、オルテガの世代論は、歴史や社会の動的変遷過程の解明にきわめて有効な視点・方法を提供するにちがいないと筆者には思われるのである。

# <註・引用・参考文献>

- (1) 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一 編集：現象学事典、弘文堂、1994
- (2) 福武直編：世代、現代人の社会学（新社会学辞典）、130-133、河出書房新社、1963  
 \* 世代についての若干の参考文献を挙げておく。高橋徹：世代、ブリタニカ国際大百科事典、11、379-382、ティビーエス・ブリタニカ、1974：杉山武：オルテガの「世代論」—歴史的方法として—、広島修大論集・人文編、45（2）（通号 86）、2005：色摩力夫：オルテガの世代論、国際経済論集、7（2）（通巻 14）、2000：大久保哲郎：オルテガの世代論：ディルタイとの関連におい

- て、比較思想研究、19、1992：早坂泰次郎 編：世代論—歪められた人間理解—、日本 YMCA 同盟出版部、1962：日高六郎：世代、岩波講座・現代思想（現代日本の思想）、11、岩波書店、1957：清水幾太郎：現代文明論、岩波書店、1953：Marías, J.: Generations - A Historical Method-, translated by Raley, H. C., The University of Alabama Press, 1970: Ortega y Gasset, J.: Man and Crisis, translated by Adams, M., W.W. Norton & Company, New York, 1962: Graham, J.T.: Theory of History in Ortega y Gasset - The Dawn of Historical Reason-, University of Missouri Press, Columbia, 1997
- (3) Osés Gorraiz, J.M.: La sociología en Ortega y Gasset, 166-167, Editorial Anthropos, Barcelona, 1989: Ortega y Gasset, J.: El tema de nuestro tiempo (1923), Obras Completas, Tomo III, 147, Revista de Occidente, Madrid, 1983; 井上正訳、現代の課題、オルテガ著作集 1、184-185、白水社、1970
- (4) Ibid., 166: Marías, J.: op. cit., 83-87
- (5) Ibid., 166: Ortega y Gasset, J.: Vieja y nueva política (1914), Obras Completas, Tomo I, 270-271, Revista de Occidente, Madrid, 1983 \*  
 オルテガは次のように述べている。「フィヒテによればここにこそ真の政治家の義務である使命がある。その使命として、事実そうであるところのものを宣言すること、周囲の話題から推し量ること、ある社会グループやある世代の表明されない内密な意見を明確で明らかな形式で公にすることなどが挙げられよう。お互いにコミュニケーションし合うべき喫緊の思想は、新しい世代を召集することが必要であるというこの事実の考察からすべて生まれてくる可能性があると言えよう」と。
- (6) Ibid., 166-167: Ortega y Gasset, J.: Don Gumersindo

- de Azcárate ha muerto(El Sol,15 de diciembre de 1917),Obras Completas,Tomo III ,11, Revista de Occidente,Madrid,1983 \* ゴライスによれば1933年の作品は、1923年の作品と比べるとそれほど重要な新しさを提供していない (Ibid. , 167)。
- (7) Ortega y Gasset, J.:El tema de nuestro tiempo(1923), Obras Completas, Tomo III , 146-147, Revista de Occidente, Madrid, 1983; 井上正訳、現代の課題、オルテガ著作集 1、183-184、白水社、1970
- (8) Ibid. , 147; 同上訳書、184-185
- (9) Ibid. , 147-148; 同上訳書、185
- (10) Ibid. , 148-149; 同上訳書、185-186
- (11) Ibid. , 148-149; 同上訳書、186-187
- (12) Ibid. , 149-150; 同上訳書、187-188
- (13) Ibid. , 151; 同上訳書、189-190
- (14) Ibid. , 152; 同上訳書、190-191
- (15) Ibid. , 152-153, 154; 同上訳書、191-192, 194
- (16) Ibid. , 153, 154; 同上訳書、192, 193
- (17) Ibid. , 154, 155; 同上訳書、194, 195  
\*オルテガは「品行方正の男ペドロ」の殺人事件の例を挙げている。「ペドロが隣人を殺したという話を聞いて、次に、その隣人がペドロの娘を恥ずかしめていたことを知るにいたって、われわれはその殺人行為を充分に理解し得るのである。その理解は、だから、前者が後者から、報復が凌辱から、疑いえない経路をもって、数学的真理を保証する明証性に等しい明証性をもって生じたものであることを、われわれが看取するところに成立する」。「われわれは、もし娘のうけた凌辱を知っていたとすれば、ペドロは隣人を殺すかもしれないことを、その犯罪に先立って、同様の明証性をもって予言しえたであろう」と (Ibid. , 154; 同上訳書、194)。
- (18) Ibid. , 155; 同上訳書、196
- (19) Ibid. , 155-156; 同上訳書、196-197
- (20) Ibid. , 156; 同上訳書、197
- (21) Ortega y Gasset, J.:En torno a Galileo(1933), Obras Completas, Tomo V, 31, Revista de Occidente, Madrid, 1983; 前田敬作・山下謙蔵共訳、危機の本質―ガリレイをめぐる―、オルテガ著作集 4、45-46、白水社、1970
- (22) Ibid. , 32; 同上訳書、46, 47
- (23) Ibid. , 33; 同上訳書、49
- (24) Ibid. , 34, 35; 同上訳書、51, 52
- (25) Ibid. , 36; 同上訳書、53
- (26) Ibid. , 37; 同上訳書、56
- (27) Ibid. , 37-38; 同上訳書、56-57
- (28) Ibid. , 38; 同上訳書、57-58 \* また地球上に存在している孤立した集団に関してはオルテガは、「われわれの世界に参加していないから」、「われわれと同年齢であるから」といって、われわれの世代にぞくするものではない」と言っている。
- (29) Ibid. , 38, 38-39: 同上訳書、58, 59-60  
\* 『『今日』』には、すべての『『今日』』には、さまざまな世代が並存して生きている。「年齢に応じてそれらのあいだにむすばれるもろもろの関係は、共鳴と反抗、一致と対立との緊張した構造をしめしている。あらゆる瞬間に歴史的世界の現実を決定するのは、この緊張関係である」。「歴史研究の方法にまで展開された世代という理念は、この構造の体系を過去の全体に適用しようとする試み」である。
- (30) Ibid. , 40; 同上訳書、60-61 \* オルテガは世代反対論の、「おなじ日に呱呱の声をあげた人たちが真に同年齢だ」とし、「世代とは、根も葉もない幻影であり、かつて気ままな概念で、その適用は、かえって現実をゆがめ、いつわるものである」という

主張に対しては、「歴史が必要とするのは、まったく特別な厳密性、つまり、まさしく歴史的厳密性であって、これは、数学的厳密性ではない」と答える。

- ③① Ibid., 40; 同上訳書、61-62 \* というのは、「人間が数をかぞえる術をおぼえるまえに、いわゆる年齢層にしたがった未開民族の社会がすでに出現していた—そして、今日でもなおそのとおりのおこなわれている」のである。「あらゆる事実のなかで最も根本的なこの事実、それほど動かしがたい現実」なのであって、それゆえ「社会が個々の人間のしめている位置に応じてみずからを三ないし四のグループに分けることによって自然な形態をとっている」のである。
- ③② Ibid., 40-41; 同上訳書、62
- ③③ Ibid., 41-42; 同上訳書、62-63, 63-64, 64-65 \* ただこれまでの「年齢段階」という概念は、ただ個人の生という観点からのみとりあつかわれてきた」ゆえに、プルータルコスの少年・青年・老人、イソップ寓話の青年・壮年・老年・老衰、アリストテレスの青年・成人・老人のごとくに、「生の諸段階の循環と性格について見解の不一致がみられる」のである。
- ③④ Ibid., 43; 同上訳書、66
- ③⑤ Ibid., 43-44; 同上訳書、67-68 \* 「若い世代は、この点でみずから考えている以上の重大な誤りをおかしたのである。この誤りは、根が深く、破局的な結果をまねくかもしれない。しかも、この結果は、若い世代にとってのみ破局的である。というのは、古い世代にとっては、もはやほとんど破局の危険はないからだ」。
- ③⑥ Ibid., 45; 同上訳書、69-70 \* 「ひとりが他の者の肩の上に立ち、こうしてピラミッドの頂点に立つ者は、他の者たちより

優越しているとおもう。しかし同時に、かれは、他の者たちの捕虜であることをも悟らざるをえないのである」。そしてオルテガは「過去」について次のように理解する。すなわち、「過去は、まったく突然に消え去ったりなどしない、われわれは、たんに空中に浮かんでいるのではなく、むしろ過去の肩の上に立っているものであり、いわば過去のなかに、厳密に固定された過去のなかに立っているのである。この過去は、人間の歴史の今日までの経過から成り、まったく異なった結果になったかもしれないが、ひとたび起こった以上厳然としてここにあるのであって、われわれが難破者としてなんとしてでも漕ぎぬけなければならないわれわれの現在である」。

- ③⑦ Ibid., 47; 同上訳書、71-72, 73) \* 色摩力夫氏は①幼年期②青年期③壮年期④熟年期⑤老年期と命名している。前田敬作・山下謙蔵氏の命名では①少年期②青年期③導入期④壮年期⑤老年期となっている。
- ③⑧ Ibid., 48, 49, 50; 同上訳書、74, 76-77, 78
- ③⑨ Ibid., 51-52, 52; 同上訳書、80-81, 84 \* オルテガは、「どの世代にも偉大な人物たちが輩出しなければならないという義務」はないが、「偉大な人物の出なかった世代には、気の毒だという思いがするだけ」であると言う。しかしその世代の人間の生も、「現実性に欠けているわけではなく、傑出していると凡庸であるとかかわりなく、独自の一回かぎりの相貌をもっている」と指摘している (Ibid., 52; 同上訳書、81)。
- ④① Ibid., 50-51; 同上訳書、79
- ④② Ibid., 53; 同上訳書、86 \* オルテガは「歴史の調性<sup>ちようせい</sup>が十五年ごとに変化するというこの仮定によって、われわれは、われわれの時代のなかで方位を定め、おおよその



診断に達することを試みることができる」と言う。ただし、彼は「科学的な見取図が結局のところ規定しようと試みるものを成功させるのは根本においてはただ歴史だけである、という留保だけは、いつもつけておかねばならない」とも忠告しているのである (Ibid., 54; 同上訳書、86-87)。すなわち当該の命題に応じた視点・パースペクティブの取り方によって、歴史上の世代は長短・大小様々なパターンで設定され得るということであろう。

(42) Ibid., 52, 53; 同上訳書、84, 85-86

(43) Ibid., 55; 同上訳書、88-89 \*オルテガに言わせれば、「歴史とはまさに、かつてあったことをふたたびよみがえらせ、それを理念のなかでもう一度体験しようとする試みにほかならない。歴史は、ミイラの陳列であってはならぬ。歴史は、それが現実にあるところのものとならねばならない。それは蘇生への、復活への熱烈な試みだといってよい。死にたいする光栄ある戦いなのである」。だから、「一切の人間的なものが、というのは人間の生が、そこから湧きでてくるところの、そして、そこにおいてのみ生が現実性をもっているところの、あの永遠の泉—この泉からどのようにして湧きだしてくるかをしめさないかぎり、なにかをほんとうに物語ったとか、歴史的に叙述したとかいうことはできない」。このような意味で、オルテガが「歴史という語によって理解しているのは、一切の事象をばその過去性を越えて、その生の源泉にまでつれもどす仕事」であるということである。すなわち、「その誕生に立ち会う」、「もう一度成立し存在するようそれを強いる」のである。それをいわば「新生児として、生まれたときの状態 (status nascendi) に置かねばならない」のである。「歴史という

ものは、われわれが人間の過去全体をはかりしれざる潜勢的な現在に変え、現実<sup>ほうはい</sup>にわれわれのものであるところのものを澎湃たる巨大な力にまでひろげることを得させてくれるもの」である。「もし歴史がそうしたものでなければ、歴史家の仕事に必然的にともなう非常な労苦を是認することは困難であろう」とオルテガは言っている (Ibid., 55-56; 同上訳書、89)。したがってオルテガによれば、「過去のある事実をほんとうに理解しようとするには、他方において、われわれ自身の現在および未来によってそれに照明をあてなければならない」のである (Ibid., 56; 同上訳書、90)。\*オルテガはこの『ガリレイをめぐる』の第5章「世代という理念についての再説」において、「前回までの講演によって、『生』および『世代』という概念についてしっかりと、明瞭な内容を理解していただくことに成功したと信ずる」と言明している。すなわちオルテガは、この著作の第4章までの世代論によって「世代」の明確な内容を論じ切ったと確信しているのである (Ibid. 59; 同上訳書、96)。そしてこの後、この章ではオルテガは世代という理念の有効性を、近代の幕開けとなったルネサンスという時代状況において検証しようとしている。

(44) Marías, J.:op. cit., 69, 150

(45) Morón Arroyo, C.: Sistema de Ortega y Gasset, 285-286, Ediciones Alcalá, Madrid, 1968.

(46) Osés Gorraiz, J.M.:op. cit., 175;Ortega y Gasset, J.:op. cit., (Tomo V ), 69-70;前掲訳書、114

(47) 長谷川高生：大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座—、ミネルヴァ書房、1996;高橋信次：心の発見 (神

理篇・科学篇・現象篇)、全3巻、経済界、  
1971/1971/1973：大川隆法：太陽の法・黄金の法・永遠の法、全3巻、土屋書店、  
1987：レムリア・ルネッサンス編：地球時代の志士たちへスピリチュアルメッセー

ジ<1>一、たま出版、2005：レムリア・ルネッサンス編：宇宙時代の神の子たちへスピリチュアルメッセージ<2>一、たま出版、2006